



# 執念と「俳」——秋元不死男の晩年

## 庄中健吉

昭和五十二年七月、七十六歳で没した秋元不死男のいつかを「晩年」というべきか。いろいろの見解はあるが、昭和四十七年以降の五年余として論を進める。昭和四十七年は不死男が俳人協会副会長に就任した年である。副会長といえは名誉職的な色合いが濃い。それまで、幹事長、理事長として、多分に俳壇情勢を意識した行動や言論を行ってきた不死男である。例えば、昭和四十五年一月号「俳句」に「我が主張・我が俳論」を書いたが、論の主流は不死男の俳句観そのままであるとしても、表現の節々には俳人協会の立場からの配慮があり、不死男一流の筆法も逆効果を生んで、俳壇に波紋をまきおこしたことが思い出される。副会長就任はそうした束縛から離れて、不死男生来の文学観、俳句観の上に立つ活動を始めた契機といえよう。晩年という語感からは離れるが、不死男終年の再出発の時機として、昭和四十七年を選んだのはこのような事情による。

### 連作への執念

流灯に傘熱くして恋クラゲ  
流灯を華燭ヒラメが砂平す  
流灯に涙乾かすチヌ比丘尼

昭和四十五年の作で、流灯と魚の組合せ連作十八句のうち五句である。十八句のすべてに「流灯」と片仮名書きの魚の名を入れる。神田秀夫が『甘露集』鑑賞の一文を「氷海」(昭53・2)に寄せたが、その中に「照明を水中に向け、人の投影としての魚の十態百様を描いて行った一幅の力リカチュア。したがって、やけに人間くさい魚が次々に游泳して来ては、そのポーズにライトをあてられている。よくこんな句、作る気になったものと、以前の作者を知る者は啞然とする華かさ」と書いた。

この流灯連作は昭和四十五年であるが、本稿の範囲とした昭和四十七年以降には以下の三連作がある。

その一は昭和四十九年四月号「俳句研究——秋元不死男特集」に寄せた「雪女郎」五十句である。

峠路の窓木のしまく雪女郎  
鼻かんで雪崩をおこす雪女郎  
兎にはももいろ見ゆる雪娘  
熊の子に立ちませと雪娘立つ  
炭馬が息かけて消す雪女郎  
などで、雪女の悲しいペーソスが漂う。

その二は、昭和五十年七月、埼玉県高麗郷吟行三十句。  
大早の松は根締めを武蔵ぶり

昭和四十七年、不死男はヨーロッパ俳句旅行団に団長として参加したが、帰国後の作として「マロニエの巴里の実植うる秋の声」(金入に銭のフランや暮の秋)の二句を残しただけで旅行中の作はない。また、二年後の「氷海」夏季鍛練会でも作句がなかった。前者については日本と外国の風土のちがいが、後者では体調不良と、それぞれの理由づけはあったにしても、秋元不死男がいわゆる詠詠派俳人ではないことを示している。

不死男の旧作に、

主題消ゆ海苔一枚を焼きたるに (昭26)  
跳ぶ蝗主題が無くて誰の詩ぞ (昭31)  
があるが、主題追及、言葉をかえれば作る俳句、文学としての俳句が終生の願望であったことは間違いない。そういう方向を貫くために、俳壇の束縛を脱してから、一つの主題を追う連作を試みた。

流灯に 天草啞へブリ参ず  
流灯へイカ行く篤き病押し

七月のなにも落さぬ谷時間  
還らざる歩や男根や素炎天  
炎昼の二時の古墳の名無草  
まほろばに小瑠璃の名器ひびきけり

など。流灯、雪女郎の二つが想像の作であるのに対し、こちらは属目吟である。ただし、属目といっても写生ではなく、属目に発する想念の作で、一貫して、刻々を追及する。一か月前に同じ場所で行われた夏季鍛練会では不作であったが、単独で同地を再訪して作り上げたもので、晩年になって燃え上がった執念を見せつけられる。

その三は同じ年の「茎石や山からころげ出でしもの 守能断腸花」に触発されて作った「茎石」十五句。

茎石の金輪際の寺坐り  
茎庄して一念呆けの夜明け石  
雨の日やいとどを誘ふ茎の石  
茎石の雲恋石の夜泣石  
山恋ひの黒き涙の茎の石

など。守能断腸花は「波柿」に属し、職場の先輩で、若き日の不死男に俳句の手ほどきをした。「断腸花の俳句は頭にこびりついていて、特に俳句が職業になり、自分らしい句が作れるようになった戦後は、句を作るとき断腸花の俳句が目の前にちらついてくる」(「俳句」昭44・4)という述懐がある。吟行句とは異なり、茎石を通じてイメージを広げた作ではあるが、流灯、雪女郎、茎石の三連作を通読すると、句の底に

流れるものが変化していることがわかる。ともかくも、晩年  
に至って、俳句の可能性追及に賭けた執念が感じられる。

### 不死男の「俳」

「俳句」昭和五十二年十月号の「秋元不死男追悼集」で、  
山本健吉氏が不死男の全句業を回顧して、その終りに「俳句  
を『俳』たらしめるもの、そのさりげない光線が、近來の不  
死男の句には見えはじめて来たように、私には思われる」と  
し、その例として、

霧籠に女身ただよふ夜なりけり (昭48)

母の日の長湯や存と亡うつ (昭48)

しんがりよろこぶ家鴨なり暖か (昭49)

水澄みて亡き諸人の小声かな (昭49)

てのひらに時は過ぎゆく唐辛子 (昭49)

などを挙げ、さらに、「在來の彼のもの、俳句には見られな  
かった、なごやかなもの、あるいは読む者の心をなごませるや  
さしさが、どこかに漂っているように思う。たぶんそれは、  
不死男が老いて身につけるに到った自在さ、また遊びの樂し  
さとも思え、それをもとに拡がってきた彼の俳の小宇宙だと  
も思われる」と布衍する。

ほかに、不死男晩年作について、俳味を、あるいは軽み  
を指摘した俳人が多い。筆者も『俳人・秋元不死男』の序論  
で、不死男の到達点を「原始象徴論」の見地から捉え、

たなごころ 繭を妃と思ひけり (昭46)

人は肩を固くして応えてくれ、そうした人々が私の眼にぼろ  
とすすんできた……。

この皆吉爽雨感激の病床吟は、昭和五十二年二月号「俳  
句」に前記「術前術後」として三十句、同じく六月号に「病  
床余滴」として三十句が掲載された。

前の「術前術後」はS字結腸部腫瘍手術のため日本鋼管病  
院入院中の句で、〈熔接火花秋天にみて入院す〉で始まり、

道産の付添婆と秋惜しむ

秋思ただ点滴雫みあげをり

生きたれば待つ日またくる葛湯かな

ぼろぼろの秋の雲ゆく手術痕

術後の身寒し煮えたか葱鮓鍋

などで、後の「病床余滴」は居宅近くの井田病院再入院中の  
作。〈豆撒いて時過ぐ中を入院す〉で始まり、

水枕して、蟻の道思ひをり

春惜しむ白鳥の如き渡瓶持ち

わが立てば病壁垂るる花ぐもり

テレビ化の三鬼有情や春の果

床づれや天に寝返るつばくらめ

などを含む。「術前術後」は病苦が翳を引き、自力で起きる  
ことができなくなった重症の「病床余滴」のほうには達観か  
らくるゆとりが感じられる。平畑静塔氏は「俳句」の追悼号  
に、この病床作を中心に長文の悼文を書き、不死男は自分の  
業病の正体を知らんふりを決めこんだとして切ながる。そし

わが骨を見てゐる鷹と思ひけり (昭47)  
餌を練るとめどなく鳴く遠蛙 (昭51)  
などを例句として挙げた。

俳といい、軽みといい、原始象徴といい、ことばはいろい  
ろあるが、不死男のこのような静かな句作りが、前項の連作  
の試みと平行して、単作として作られていった。

煙草火に指ぬくめて去年今年

元日を石積む賽の河原人

占へば北へ飛び去る初鴉

心経に不の字無の字や誦みはじむ

初夢に一寸法師流れけり

昭和四十九年年頭の五句をそのまま写した。前掲諸句と読  
み合わせれば、句々について触れるゆとりはないが、素材に  
広がりがあり、心象に深淺の差がある。高齡の俳句がとかく  
ワンパターンに流れやすいなかにあって、このような多彩な  
作品を作り得たことは、前項の連作精進と無縁ではあるま  
い。

### 最晩年の句

前記「俳句」秋元不死男追悼号に皆吉爽雨氏が書く。「正  
月にとどいた「俳句」の二月号には「術前術後」という秋元  
さんの三十句がのっており、むさぼり読み、ひどく感動し  
て、その夜開かれた五十人ほどの句会で、その中から抄出し  
て聞いてもらった。(中略)声を張ってよみあげる私に、人

てへわが立てば病壁垂るる花ぐもりを、不死男が五十年が  
かりで作ってきた俳句の総仕上げであるとする。「ここにあ  
るのは、或る人間の一生を凝縮して終った最後の舞台姿なの  
だろう。不死男畢生の演技でもあり、又力作であろう」とす  
る。また、弟子である筆者としては、前記の、

春惜しむ白鳥の如き渡瓶持ち

の一句が、いつまでも眼前にちらちらしていて離れない。そ  
れに「テレビ化の三鬼」の句は、西東三鬼との永い交友を総  
括する一句として心に残る。

老鶯や湧きくる悔のどこよりぞ (昭51)

ゆらゆらと亡母われよぶ罌粟のかげ (昭52)

稿を終るにあたり、秋元不死男晩年の句として、この二句  
を掲げる。

第一句は入院近く、体調不良で筆債を抱えていたときの作  
であるが、不死男が生涯を顧みて、思わず口から出た「湧き  
くる悔」という言葉である。「悔」とは何か。サーピス精神  
のあり過ぎたことか、世過ぎの道として俳句を選んだことか  
……。側近にいた筆者の心を握んで離さない何かがある。

第二句は病篤きときの作。不死男が多く作った母恋いの句  
は、ケシのかげから不死男を呼ぶ母の姿として終った。この  
ような句に技法のことを書いては失礼にはなるが、不死男の  
特長であった擬態語の最終の句でもある。「ゆらゆらと」が  
生み出す情感に、筆者の心も「ゆらゆらと」揺れる。